

これからの計量生物学の発展を担う生物統計家の育成

安藤 宗司 (東京理科大学)

まず、私の経歴を簡単に述べます。修士課程修了後、企業に就職し、医薬品開発の統計解析職として 6 年間従事致しました。在職中に博士後期課程に進学し、カテゴリカルデータ解析に関する研究で博士 (理学) を取得しました。2017 年 4 月から現職 (東京理科大学工学部情報工学科助教) となります。私が思う東京理科大学の特徴は、教育かと思いましたが、教育という側面から計量生物学への抱負や想いを述べていきます。

私が所属している東京理科大学工学部情報工学科は、経営工学科から改組し 2016 年 4 月に開設された新しい学科です。情報工学科では、「ソーシャルデザイン」、「データサイエンス」、「ソフトウェアデザイン」、「インテリジェントシステム」の 4 分野を柱として、新しい時代の情報システムの研究開発を行っています。データサイエンス分野に 3 研究室が属していますが、寒水研究室と篠崎研究室の 2 研究室が計量生物学 (特に、医療統計学) を専門としています。吉村功先生、浜田知久馬先生らが中心となり、経営工学専攻のときに社会人向けの「医薬統計コース」にて企業の生物統計家への教育を行っていたこともあり、情報工学科でも医療統計学は重要分野と位置付けられています。現在も大学院情報工学専攻のカリキュラムとして医薬統計関連科目が多数用意されております。

寒水研究室と篠崎研究室に配属され、大学院に進学する学生の多くは、医薬品開発の統計解析職に就くことを希望します。実際に、医薬品開発の統計解析職に従事している東京理科大学大学院工学研究科経営工学専攻出身の方は多いので、先輩方の活躍している姿を見て、自分もそうなりたいと思っている学生が多いのではと推察します。

私の指導方針として大事にしているのは、いい意味で学生と対等であることです。私が主に担当している修士課程の学生に指導する際、まず研究に関しては対等な関係であることを伝えていきます。教員から言われたことをやるのではなく、まずは自分自身で考えること、分からないことがあれば教員と納得するまで議論して解決していくことの重要性から説明します。企業で働いていた経験から、自分自身で考えること、自分の意見を持つこと、そしてそれを発信していくことの重要性を感じていますし、研究でも重要であると思います。学部生のときは教員に言われたことをやるが多いことも影響しているかもしれませんが、修士課程に進学した直後は自身の意見を発信できない学生も多いです。最初に意識を変えるのが大事なので、どのように指導するのがいいのか模索しながら頑張っているところです。

私が現職に着任したとき学部 4 年生で研究室配属された学生が修士課程を修了し、2020 年 4 月から企業に就職しました。医薬品開発の統計解析職に就いた学生も多いので、計量生物学の発展を担う生物統計家として今後活躍してくることを期待しています。

これからの計量生物学の発展を担う生物統計家になるかもしれない学生を教育するという重要な役割を担っているのだと本稿を執筆しながら、改めて思った次第です。まずは、私自身が計量生物学の発展を担う生物統計家になれるよう、日々努力をしなければいけません。私の周りの教員から学ぶことも多いですし、学生から学ぶことも多くあります。博士後期課程の学生には、医薬品開発の統計解析職に従事している方が複数名おり、その方々から学ぶことも非常に多くあります。現在、私は非常に恵まれた環境にい

るので、この環境を活かして成長していきたいと思います。

最後に、執筆の機会を与えてくださったことに感謝を申し上げて本稿を締めさせていただきます。自分自身を見つめ直すいい機会になりました。ありがとうございました。